

阿波公方列伝 (3)

2代阿波公方 足利義助

文化振興課 森脇 佳代子

2代阿波公方 足利義助は、14代室町幕府將軍 足利義榮の弟にあたります。初代阿波公方 足利義冬には息子が3人いましたが、長男は將軍就任から1年も経たないうちに早世したため、二男の義助が阿波公方をつぎました。3兄弟とも平島で、義冬が西光寺に仮寓している間に生まれています。

義助は阿波公方一族にとって「室町幕府滅亡」と「蜂須賀入国」という大きなターニングポイントに生きた人物です。キーワードを2つ挙げるとするならば「長宗我部氏との関係」「3000貫から100石に※」でしょうか。

永禄11年(1568)、義助の兄義榮の病死、織田信長・のちの15代將軍義昭の上洛により、阿波公方勢力は阿波に撤退します。失意の中、義冬は、翌永禄12年に平島の三社神社に石灯籠を寄進しています(阿南

市指定文化財)。

さらに義冬・義助父子に追い打ちをかける大事件が起きます。室町幕府の滅亡です。天正元年(1573)織田信長は15代將軍足利義昭を追放し、足利氏を頂点とした日本の政治システムが崩壊してしまいます。これにより阿波公方一族は室町幕府將軍という帰る場所を失ってしまいました。その約3カ月後、義冬は亡くなり、義助が2代阿波公方となります。

またこの頃から長宗我部氏の阿波侵攻が始まります。ただし、長宗我部氏は平島の阿波公方に対して、天正5年と天正10年の2度にわたって領地の保証を行い、馬や土佐和紙、布などを贈って友好をしめています。この時点では、阿波公方は領地16カ村(平島12村と那賀山のうち吉井・楠根・仁宇・和食4村)を有す、3000貫(現在の金額に換算する

と3〜4億円とも)の土地の領主でした。

しかし、さらなる悲劇が阿波公方一族をおそいます。天正13年(1585)蜂須賀氏の入国です。豊臣秀吉の四国征伐により、長宗我部氏は撤退しますが、今度は秀吉の部下である蜂須賀氏が阿波に入国し、阿波全体の支配体制を構築していきます。その流れの中で翌天正14年、義助は領地16カ村を取り上げられ、代わりに茶料名目で平島館の周り、わずかに100石の領地を与えられることとなります。これは収入が実質60分の1ほどに減らされることを意味します。義助は途方に暮れながらも、家臣の大部分に暇を出し、江戸時代に向かう大きな時代の流れを受け入れていくこととなります。

義助に関する史料は多くなく実状をうかがい知ることは難しいですが、歴史の転換期にあつて荒波にもまれた人生であつたことは想像できます。文禄元年(1592)義助はその波乱の人生を平島にて52歳で終えます。

※「貫」は銭の単位(貫高制)、「石」はお米の単位(石高制)です。主に戦国時代は「貫」で、江戸時代は「石」で年貢収入を換算しました。単純比較はできませんが、だいたい1貫≒2石と換算されることが多いようです。



長宗我部元親



蜂須賀家政像(徳島中央公園)



足利義助のお墓(西光寺)

問い合わせ
文化振興課

☎ 22-1798